

令和4年度 第1回 川崎市岡本太郎美術館部会 会議録

■日時 令和5年3月3日(水) 14:00~15:50

■場所 川崎市岡本太郎美術館 創作アトリエ

■出席者

委員 橋本善八(部会長)、杉浦幸子、加藤弘子、長門佐季、藤嶋俊會

事務局 土方館長、佐々木副館長、佐藤、山崎、片岡、那須川、石原、富永、喜多、
出口、尾崎、千村、鈴木、笹川

小山(指定管理者)、森近(指定管理者)、山内(指定管理者)

■傍聴者 0人

■議事

・令和4年度 事業経過・報告について

1 展覧会事業

(1) 企画展

①「小松美羽展 岡本太郎に挑む—靈性とマンダラ」展

②「第26回岡本太郎現代芸術賞(TARO賞)」展

(2) 常設展

①「太郎の創造展—創らなければ、世界はあまりにも退屈だ」展

②「岡本太郎とにらめっこ」展

2 資料収集・整理、調査研究

3 作品の保存・修復、貸出

4 普及企画

5 広報活動

6 施設・設備の整備

(1) 施設・設備の整備

(2) 休館中の館内整備・補修

7 その他：予算・決算、統計データ等について

(1) 予算・決算

(2) 統計データ

(3) 展覧会ポスター

● 令和5年度事業予定について

● 事業評価について

■議事録

開会に先立ち、館長から各委員に委嘱状を交付。

○開会

【土方館長挨拶】

【委員自己紹介】

【事務局職員自己紹介】

【部会長の選出】

委員からの推薦を確認。推薦者がいなかったため事務局より橋本委員の就任を提案。全委員の同意を得て、橋本委員を部会長に選出。

【橋本部会長 就任挨拶】

【会議公開・議事録作成に関する説明】

事務局より全委員の半数以上である5名出席により、会議の成立を報告。傍聴希望があった場合、公開とする旨を確認。

【資料確認】

【事務局より議題1（展覧会事業）について説明】

藤嶋委員： 小松美羽展は拝見した。小松美羽の個展ではあるが岡本太郎をしっかり意識し二人展のような感じとなっていた。こういうのは初めてであったのではないか。また、動員数を見てもいろんなメディアを通じて広がっていきよよい試みであった。小松さんが子ども向けに神獣を描くというワークショップはよかった。岡本太郎美術館だからできたことと思われる。

TARO 賞については、太郎賞も敏子賞も該当がないということであったが、一つ一つを見るといろんなアイデアがあってよかった。ただダントツというものがなく今一つ足りないと感じた。曲がり角に来ているのかなと感じた。

常設展は、「創らなければ、世界はあまりにも退屈だ」という言葉が魅

力的でそれに引っ張られて企画が出来ていくのだという感じがした。にらめっこ展に関して、太郎の絵を見ていると眼玉や顔をうるさいほど描いている。それを突き詰めていて、面白い背景思想があると思った。

杉浦委員： 小松展については岡本太郎と現代作家のぶつかり合いが興味深かったという声を周囲より聴いている。小松さんは幼少期に縄文のビーナスに原体験のように影響を受けていると話している。先日、縄文のビーナスを展示している博物館の担当者と話をする機会があったが、なかなか他の美術館と連携が取れないと話していた。作家をハブにすることで何か考えもしなかった関係が作れないかと思った。今回小松さんから話を聞いて広がったというようなことはあったか。

事務局： 小松さんは長野県出身の方で、縄文が小松さんの中で大きなテーマとなっている。今回の展覧会では長野県にある黒曜石ミュージアムの協力により岡本の「渾沌」の周りに長野産出の黒曜石を小松さんのイメージで敷いた。地元の縄文や黒曜石とのつながりから小松展の展示の一部が構成されており、そういう意味で広がりがあったのではないか。

杉浦委員： TARO 賞については、太郎賞が出なかったというのは、学生や中堅の作家がモチベーションとして目指している賞でもあるので残念であった。

常設展の「創らなければ、世界はあまりにも退屈だ」はとてもよい展覧会であった。普及企画担当者が観覧者とのコミュニケーションを考えてとても工夫がされていた。いろいろな人が岡本太郎に近づく道を作っていると感じられた。太郎の言葉や使っていた画材の展示もよかった。こういった企画を続けてほしい。

加藤委員： 小松美羽展は美術館が立ち上げた企画か。それとも持ち込み企画か。主催はどこになっているのか。

館長： 主催は当館。当館の企画展はすべてオリジナルのもの。前館長あてに企画提案があった。当館としては岡本太郎美術館あるいは現代美術と岡本太郎をうまく接続させる企画を継続してやっていきたいと考えている。小松美羽展をやるのであれば「岡本太郎に挑む」ということであれば開催できることを先方に伝えた。岡本太郎の作品ありきの小松展を開催するというで始めた。

加藤委員： 今後、岡本太郎だけに目を向けるのではなく新たな作家との新しい視点を企画展の中に取り込んでいくという継続的な考えがあったうえでの第一歩ということか。

館長： 全く今まで現代作家をやっていないわけではないが、これからは岡本

太郎との関連を明確にした方が来館者にも分かりやすいのではないかと考えている。

加藤委員： 普及的な視点からの展覧会を開催されているようだが、子どもや障がいのある方向けのプログラムはどういう形で行っているか。展覧会の中でフォローしているか。

事務局： 子ども向けは乳幼児と保護者が展覧会と一緒に鑑賞する「はいはい&よちよち美術館ツアー」や夏休みに中学生を対象にして「宿題手伝いますツアー」等を開催している。障がいのある方向けのプログラムはまだあまりできておらず、課題の一つと考えている。以前に視覚障がい者の団体が来館された際に手袋をつけて彫刻に触っていただくというような試みをしたことはある。当館は常設展の中で椅子のコーナーがあり、触ったり座ったりしていただくことはできる。ただ、まだ定期的なプログラムは出来ていないのが現状。

加藤委員： 展覧会として学校団体の受け入れ・アプローチはしたか。

事務局： 通常の学校団体受け入れの枠では行ったが、展覧会で特化した形ではしていない。

長門委員： 小松美羽展に関して、岡本太郎という知名度の高い作家と現代作家を結びつけることは大事であると考えている。当館（神奈川県立近代美術館）でも今の若い人に近代を紹介するのに現在活躍する作家を挟んでという企画をしたが、歴史をつなげるという意味でも重要な企画のやり方。岡本太郎は挑み甲斐がある作家でもあるので、今後も現在活躍する作家が挑むという企画を継続していくのはよいと思う。

館長： TARO 賞については、今年の応募数は例年と比べてどうであったか。応募数は例年と変わらない。共に主催している岡本太郎記念館とはこれからの継続的発展のためにどうしていくかを検討している。方向性が決まったら部会でも報告したいと考えている。

杉浦委員： 来館者による人気投票イベントの結果は、審査員へはフィードバックをしているか。一般の来館者の結果を見ていただくことで「ここにそんな響きがあったのか」という視点を審査員の人にも理解していただくこともよいと思う。

事務局： 審査員には直接伝えてはいないが、ホームページで上位の作家は公表しているのでご存じではないか。

橋本部部长： 応募者は全国から来るのか。海外はどうか。

事務局： 海外の方からの応募もあるが、基本的には日本国内。

橋本部部长： 小松美羽展の来館者2万人というのは多い方か。

事務局： 当初はその何倍かを想定していたというところはあるが、当館の他の

企画展に比べるとかなり多い。

橋本部会長： 企画展のアンケートを取っているようだが、企画展毎に対面でのアンケートを取って分析する会社があり職員の励みや改善点の発見にもなるので効果はある。

館長： 指定管理者の広報担当が対応している。効果的な広報は続けていく必要があると思っている。

【事務局より議題2（資料収集・整理、調査研究）から議題7（その他）について一括して説明】

藤嶋委員： 教育普及を非常にきめ細かくやっている。どれぐらいのスタッフでやっているのか。学校の先生たちは岡本太郎をどう紹介しているか。郷土の偉人としてなのか芸術家としてなのか。

事務局： スタッフは主に3名で学校団体の受け入れ業務を行っている。岡本太郎は川崎ゆかりの芸術家として川崎市の学校では教えられていると思う。川崎市以外の学校からの来館希望もあり、地元の作家という以上に岡本太郎という作家の面白さで当館を選んでいただいていると思う。

杉浦委員： こうした資料はほかのところで配布されているのか。

事務局： 普及の記録集は作成していて他館とは資料交換している。今年度分からホームページで閲覧できるようにする予定。

杉浦委員： 資料の作成の仕方として、インカムも記載されているので分かりやすく記したほうがよい。また、一瞥で成果が伝わるように定量的な評価の出来るような指標となるものを入れて、努力や成果が分かりやすく伝わるようにしていった方がよいと思う。

加藤委員： 数字での評価が美術館にはそぐわないとい議論もあるが、数字を見せることで活動の特質を見せることができるという側面がある。質だけで評価するというのは難しいと現場でも感じる場所。それは、広報にも同じことがいえると思われる。資料や説明においても小松展に焦点が当たりすぎている気がするが、他の企画についての成果ももっと前面に出していく方が岡本太郎美術館の活動の輪郭がもっとはっきりしていくと思う。

杉浦委員： 資料について、広報と広告がちがうので分けた方がよい。どこにどう広報・広告をしていくのかというときに、目標を設定しそこに向けての戦略が見えたらよいと思う。

長門委員： 少ない人数で多くの教育普及プログラムを行っていて苦勞をされていると思う。学校だけでなく多様性ということを考え、大人や障がい者向

け等対象を広げるとよいと思う。

杉浦委員： アンケートに、映像に字幕が付いていないので付けてほしいとある。以前に聴覚障がい者に映像に字幕がついてなかったらどう感じるかを聞いた際、寂しいとおっしゃられた。出来れば字幕を付けた方がよい。

橋本部部长： 視覚障がい者で美術鑑賞者の白鳥氏と話をする機会があったが、私たちが思い違いしていることがあることが分かる。例えば、トイレの場所は案内サインがなくても実は前を通れば分かる、しかし、問題はトイレに入ってからで、どういう設備があるかということが分からない。当館（世田谷美術館）では十人ほどの視覚障がい者の方に実際に話を伺い、どこでどう困り、何が必要かを聞いて案内を設置したことがある。教育委員会とはどういう関係となっているか。

事務局： 教育研究会を年1回開催している。学校現場の先生に来てもらって受け入れプログラムの話等説明し、意見・要望をもらうという場所を作っている。

また、夏期実技研修に美術館を利用してもらっている。

橋本部部长： 世田谷美術館では教育委員会とボランティアの協力で、中学校全学年、約1万人位の子どもの学校団体の受け入れを行っている。また、マンモス校が来ても対応できている。参考になることがあれば情報提供できる。

子どもたちの教育は非常に重要。

館長： 地方の公立美術館は地域の子どもの生涯学習の役割を担っていると考えている。学校と教育委員会にも美術館をうまく利用していくというぐらいの気持ち持っていただきたいと思っており、美術館だけでは解決できない課題である。課題の要点をつまびらかにして行政に理解を深めていただけるよう働きかけをしていきたい。

橋本部部长： 作品の購入予算は付いているか。

事務局： 作品が購入できる程の予算はついていない。資料や小さい作品であれば購入できる規模の予算がついている。

館長： 当館は岡本太郎の代表作がそろっているので敢えて購入する必要はあまりないが、逆にメンテナンスは必要となるので修復費については相応の予算要求をしている。

【事務局より「令和5年度事業予定について」の説明】

橋本部部长： 企画展と常設展の取り合わせを考えていかなければいけないので難しいのでは。

館長： 岡本太郎は幅が広い作家であるので企画しやすい。

【事務局より「事業評価について」の説明】

- 橋本部長 評価があまりにも低かった場合、美術館的に不利益となるのか。
- 事務局： 評価については、本部会の親会議である文化芸術振興会議に報告し、ホームページでも公表することになる。理由があつての評価であると思うので理由をお書きいただき評価いただければと思う。
- 加藤委員： 事業評価が公開されるのは、今はかなり一般的な流れ。
評価は抄録での公開となるのか。
- 事務局： 評価はそのまま公表する。会議録については要旨を記録し公表。
- 加藤委員： 東京都でも都の外部評価と美術館独自の外部評価を並行して行っている。どうやって美術館の活動を説明し分かってもらうか、その伝え方というのは難しい問題。数量的な指標が効果があるというのはそういうこと。
- 橋本部長 コロナ禍となり、オンラインでのコンテンツ発信に対する視聴者数を参加者数としてカウントすべきかということがある。
オンラインと実利用者数それぞれの人数を併記するなど可視化が必要である。評価をする上で重要な視点になる。
- 館長： カウントの仕方については、工夫が必要かもしれない。

【その他】

特に質疑応答なし

○閉会